



1278
22

大河容も得ぬ

新算

ねんま

十算

佐鬼

村田

朝夷巡嶋記全傳第五編卷之二



東都 曲亭主人編輯

後輯第四十三

驟雨の長唐櫃
新関の小袋阪

再説鎌倉の執權北條時政の曩小巳とゆき經任誅伐の大將光仲を
 挙用して陸奥へ遣せり。婿を限りもあそむれば、彼地より軍を
 ありて寄る一戦ありて勝て、暴道時夏が楯箆り、鎮守府の城を
 せしむると死に、竊は嘆息あるの絶く、歡ぶ氣色や、又賊軍つきて、
 戦ひに寄る、士卒夥撃して鎮守府を退け、その戦ひの筒様、
 矢ひ小膝と鼓を、まをせり。彼彼経任の術は光仲の克く、
 わん廣綱の持腐り、雷上藤の弓前と頼む、粟の穂も、小鳥と這ふ

案山子ありなや浅らるるに依りて外人と代りて光仲と召えたり。惜
 卒と喪ふべし。意を慙むと云く程は第三度の注進あり光仲奇計と云ん
 経任が大軍と只一擧を討走り逃げを追ゆく平泉を柵と圍を精角と
 かせり御方破竹の勢ひありて賊徒の誅滅速うとと詳詳を報しうが
 時政又款を乞ふらん光仲奴が大功と立りせんとせられ又その中や言を
 飾りて功を誇る偽もあつたや腹心のものと遣してそこの勝負を白地よ
 ありしもがねとあども年来不便のありきほどう近く使や湯嶋沸太郎
 基連といふ社伎いひて建久四年の秋刀野備杖照時と相撃して當坐を命と
 隕らる湯嶋木工進基勝を子なり渠をへかか機密と委ぬべりものも
 なるこの二月の下澁渠の助の痛むとく且く身の暇を乞つ伊豆の北條へ
 退りて修善寺に赴きて湯治せ死を乞ふと依りて瘡り果ねを立入る

ねがこれも亦今とて夏の要やめはるに義時意中告て竊は相譚を
 せりとも親の心と子の心を渠をの初より光仲を具員めりて陸奥を
 軍の注進あり毎小寄の克ぬとせけが歡びく光仲を譽ると甚し又賊軍
 捷に乗るとせけが氣を屈し頭を低くのめれば是も子勝るその胸臆を掃り
 去りしつ小せ事と額を病しく春も三月と空しく暮る四月の本末を報す
 寄の士卒大なるなり時疫ありてうち取らうこれより且く虎口を解
 退けく愈むと俟とせえり時政聊慰めりてをわめりてを巨細
 ありし程は五月よりぬこの月の上澁佐味内高利下河邊
 小三郎高吉とぬ陸奥よりぬる高利の光仲の武功士卒の忠戦及義勇
 武略勇敢義邦主從武詮昌之が義を恥と雪ゆる事の類とををわめ
 下河邊高吉の光仲の三書と献りて齋する賊徒の首と実檢を備んて當下

執權時政この子義時大江廣元三善入道善信と共同註所列坐高利
 高吉と局中召入れ光仲の呈書を披見く高利高吉が此の件の
 趣を注しくしびく冷笑ひあらぶが賊徒の誅滅に不慮の資よれる光仲廣元
 功のおのぬなをてみづく着るに他の功を盗んどり也且賊の兵糧を土民に配
 分して竊し已が恩を被け或は厨川の柵を焼亡して物を奪せぬも
 といふあらぬが死にて賊の重器と私せんてあるの柵を燔らるは民の賄賂を
 貪りて彼兵糧を散せ汝れも亦あらぬがあらる小笠内へ何のあら陸奥へ赴死
 軍監の名をあらるを知り光仲が不義の初めと禁むらいの亦是同
 腹衷中に必私慾あるなし賊徒の誅伏をうとも臆みの罪あらぶのゆえに
 免れ死かくも陳びり有也と詰問れて高利の些も怯まぬ小藤を進めるを
 執權の口つく宣え死すもあらぬが何と澄扱せるやん六郡の民の

と一来賊乱は零落をうる任任竟ま亡び復天の目とうと飲び平泉の
 柵中より落せし賊を追え或は生拘り或は首級を齎しく御方の陣へ來り
 の多う光仲を賞えんと任任が盜貯る兵糧を散せ又厨川の賊徒
 誅伏の後も柵を燔らる御方は卒多う柵をあら彼處を守りがたいが
 とうち捨ちる賊の殘黨再び聚合て奪取すもあらん國家のおのれるやを
 要知れるあり焼亡すありとわりと云云計ひあれる也厨川の賊の多き
 少うびありと彼些を離散せ郡司莊官を招き集める財宝を光仲に親
 此れを封じ且く渠ホを領けりをしくあら下知と俟べしと言はれり又厨川
 兵糧を百姓に取せり彼地の農民賊乱をより耕作の便宜を先にしはらぬ
 臨むるのがあらぬといふとあらぬといふとあらぬといふとあらぬといふと
 彼任任が積貯る兵糧を土民の脂膏を盜るのも今これをりと被執湯と擡るが

ありては。上におん慈悲を預け。美かれ。て柳宮の恩澤。百姓に告
 示。し。形。如。計。ひ。ぬ。某。の。才。短。し。が。ま。で。せ。ら。ざ。り。一。旦。の。賑。給。を。う。べ。す。べ
 と。禁。や。り。ど。も。既。中。く。光。仲。の。議。せ。し。趣。件。の。如。し。と。理。り。は。あ。ら。ね。ば。その。意。は
 任。じ。な。り。彼。人。何。ぞ。不。義。あ。ら。せ。き。然。る。を。今。執。権。の。推。量。を。も。と。疑。ひ。や。あ。ひ。ひ。け
 ぬ。む。む。と。恨。を。含。む。と。い。ひ。解。け。ぬ。が。高。吉。も。進。む。且。つ。あ。ら。う。平。泉。と。火。攻
 して。全。く。任。任。と。討。捕。り。ぬ。彼。朝。夷。の。援。も。依。れ。ぬ。光。仲。あ。ら。く。小。勢。を。も。大。敵。と
 拉。た。内。外。あ。ら。し。と。れ。ぬ。と。攻。む。朝。夷。の。武。勇。捷。れ。ぬ。獨。り。の。功。と。立。く。か。ぞ。一。況
 廣。綱。の。鎮。守。府。の。城。を。よ。く。守。り。國。府。を。送。り。兵。糧。を。調。達。し。一。角。の
 勢。ひ。を。助。け。る。兩。將。の。功。多。く。び。や。あ。れ。ぬ。廣。綱。も。光。仲。の。功。は。誇。ら。ば
 人。の。忠。勇。武。功。の。載。る。呈。書。よ。い。ん。は。何。と。ん。を。あ。せ。し。中。ん。他。の。功。と。盜。け。ぬ。と
 疑。ふ。武。士。の。恥。辱。を。う。べ。ぬ。と。凱。陣。の。日。を。俟。て。誰。と。問。せ。ば。又。防。衛

べ。し。い。ん。と。憚。る。氣。色。も。な。く。答。ふ。時。政。怒。胸。は。滿。る。証。ん。と。い。ひ。不。辞。に。獲。ぬ。
 必。ず。も。大。息。つ。ぬ。頻。に。左。右。と。ん。え。り。う。そ。の。と。義。時。微。笑。く。軍。監。使。者。の。あ。ら
 せ。趣。然。あ。ら。せ。き。う。そ。う。外。廷。の。格。式。中。大。將。既。は。外。より。あ。り。て。勅。命。を。俟。せ。り。
 賊。の。采。穀。を。多。く。散。り。て。餓。る。民。を。救。ひ。に。仁。あり。後。の。禍。を。せ。ど。と。く。厨。川。の。柵。を
 燔。ら。し。智。あり。その。う。ま。く。道。理。は。稱。へ。これ。と。禁。め。ぬ。む。と。い。へ。も。軍。監。の。罪。は
 光。仲。の。私。を。た。た。す。あ。ら。せ。し。を。と。知。る。死。致。し。と。憚。あ。り。て。これ。も。大。人。の。推。量。を
 かね。ば。更。の。虚。と。實。の。目。今。あ。ら。議。は。く。く。ど。その。凱。旋。の。日。を。あ。ら。ち。賞。罰。に。時。宜。の
 あり。各。位。の。中。を。問。れ。る。廣。元。善。信。一。殘。も。及。び。遠。州。の。時。政。も。遠。慮。し。由。な。れ。ば
 あり。相。州。の。美。時。の。意。見。よ。を。後。に。あ。ら。首。實。檢。査。あ。ら。し。例。は。任。し。由。井
 濱。は。梟。ら。さ。う。ぬ。と。言。葉。ひ。と。一。執。成。り。衆。議。を。あ。ら。一。決。あ。ら。時。政。へ。か。言。の

行れども六氣色をあらうげ既よかの如くなりとも光仲のまど凱陣せし事此真
 偽も定る終るぬ首実檢を急ぐへ要なり齋しる首級は且く世内は預けの
 宿所は退りく光仲ホがむりま日と俟べし又下河邊小三郎ハ軍監に就く旅宿
 せよ光仲凱陣しと後よともかもしん沙汰わんく退り出火と嚴よひ知く僅か
 暇と取せし高利も高吉も送し面とありつゝかまき兵總軍と共に凱陣をな
 悔しなりををさうとあつてあつくせんを中かまく高利ハ高吉をねく外はあつ
 経任時夏ホが首級と薩首のどく扛擔しと軀て宿所はせりしと妻子をれば正首の
 訪慰るものもあつて五月も半過れし出仕せし沙汰は此の故も高吉も始らる
 苦めく高利と相譚あつて執権よらしと主は報をせしる歸郎の暇とあつた
 されど心もあつて奴隷をどを使つて路次もあつてあつたつと云ふは
 つのり日を俟く主の歸陣を俟りたる程も多賀藏人光仲ハ義邦夫婦と相

伴く頻人馬と急し五月廿日小稍鎌倉へ近つ経ぬこの朝光仲ハ相模路よ
 程は相模軍兵と過半後陣は退けし士卒焼く百騎許み身甲のまや
 弓矢弦と張らば甲冑ハ幾箇も長唐櫃は納しと鞍の夫役は早しり既あり
 岩瀬村の西南の離山にあつて来るつと死も曇る日の道へ滑る五月の天は
 癖なれば忽地暗くあつて驟雨は降るを空をせん蔭を夫役もこれ慌
 忙くあつて件の長唐櫃を樹下へ早をんと稲塚とち倒し夏草を踏乱し
 衆人罵駟ぐ折くこれ亦長唐櫃と四箇をり扛擔せし一徳の宰領は附
 邊と過るあつてこの夫役ハ彼長櫃はあつて長櫃の枝をまわらうと
 些破りし件の宰領駭死怒りてあつて狼藉を奴原にこれハ將軍家の御代と
 稟く年々五月は乞祈禱の神符供物と献る何がの院の長櫃のふら破りし
 こそ非道なれと鎌倉へ走あつてこの趣を言えあつて長櫃ハ四あつて汝ホ小

箱毛四郎重成北條時政の婿この時既に初編を見え

預けし衆皆矛と教圍く飛ぶごとくは走去れがけぬるとも果はるの二隊
八九人長唐櫃とち捨て走りてをばあり夫役はこれ駭け追追て勸解を
ちふ一致せられ竟て食うも聚會て相譚は鎌倉殿へ進らば神符の長櫃
ありとてバ捨られうとてち置れ且これちも握りて多賀殿まで入らん
俗は重荷は重附とこのゆかんと喧はる替りの此八九人諸肩入れ早起は
あひより甚重なりとて泥雨を齧る番の裾は西日夕風涼しうられ衆皆
只音急げども光仲の雨は追れ馬の足掻とちありとち輕く追つぐもあは
さりと後陣のち積を返は焦燥罵りあはく足並取次は走りたり浩処は
身甲ある一個の武士後者十人ありとち道次の教壘の陰より光仲の
夫役と遮留りし軍役們且く等と光仲の長櫃をちこれ鎌倉御内の
既近箱毛四郎重成が家男北條殿のち外孫市の別當と奉は箱毛太郎

重平ありがけし將軍家の密証と受とありて穿鑿を死すてあはるり
この処は出通の御教書はありその長櫃と悉蓋うち披たくとくをせと声あり
立ち呼被れば夫役は再び驚れと三十餘箇の長櫃と存一其処は昇居て皆共居
跪れ仰けりゆひぬぬ甲冑と衣裳のちあられも御覽は櫃毎は鎖とちし
多賀殿の隊兵とち通先へゆせとて鍵はあはれとていをもあは眼と睜
鍵をられと許さんや彼ち披けと教圍は用意とちなり箱毛が夥兵小阿と
応とちあく骨は排する大にちち鐵櫃を居やと櫃の鎖を蓋り兵は打
破りてはち推却する或は士卒の甲冑あり或は舊垢つたる衣裳の外物あり
既とち最後は長櫃四箇送りうこの鎖の大にちち封皮あるは怪し故
ちた何れの院とちんん祈禱の神符供物と鎌倉へ進らば長櫃とちいられ



夫役と証
重平賊罪と
糾

これより左かまへみち

稀毛太郎重平

草子五巻

嚮^{まは}は如此^{ちかく}のりあり路傍^{みちべ}に捨^すられると。その中^{うち}にうらむ措^{おさ}れど早^{はや}は
 邁^もく多^{おほ}賀^が殿^の追^おつ追^おつ告^つ告^つまんといひく。めと漫^まりこの櫃^びどの許^{ゆる}せと
 皆^{みな}共^{とも}供^{たも}ようも勸^{すす}鮮^{せん}はと重^{おも}平^{ひら}はく冷^{ひや}笑^{わら}ひ口^{くち}さうくも持^{もち}えり。そとととて
 不^ふ審^{しん}しどく^{どく}の論^{ろん}は無^む益^{やく}あり。さうも扱^あけと下^{くだ}知^ちれが勢^{いき}ひ猛^{まう}る夥^{おほ}兵^{へい}と
 狂^{きやう}夫^ぶ役^{やく}と擡^{たい}遣^{せん}り突^つ退^{たい}け件^{けん}の四^よ箇^{かん}の長^{なが}櫃^びの鎖^さも放^{はな}く推^おし中^{ちゆう}に神^{かみ}符^ふ供^く物^{ぶつ}
 の似^にむその両^{りやう}箇^{かん}の長^{なが}櫃^びは金^{かね}銀^{ぎん}あり玳^{たい}瑁^{ぼう}あり世^よは掃^はぬは死^し調^{てう}度^どあり又^{また}兩^{りやう}
 箇^{かん}の長^{なが}櫃^び中^{ちゆう}に綾^{あや}羅^ら錦^{きん}補^ぼあり信^{しん}夫^ぶの捐^{けん}衣^い陝^{せん}の細^{さい}布^ふなど陸^{りく}奥^{おく}は名^な々^々の産^{さん}物^{ぶつ}も多^{おほ}
 う。夫^お役^{やく}亦^{また}奔^{ほん}一^{いつ}とれとんくあつていふとさういふ呆^{おろ}れらるる。所以^{ゆゑ}とゆふ。當^{あた}下^{くだ}重^{おも}平^{ひら}
 まは怒^{いか}りて奴^{やつ}原^{げん}かても偽^{いつはり}と光^{あき}仲^{なかつ}元^{げん}米^{めい}正^{せい}夫^ぶか。猛^{まう}は兵^{へい}権^{けん}を執^とりて功^{こう}を憑^{たも}て
 私^し慾^{よく}あり後^{のち}の禍^{わざはひ}を穰^もれを言^いと飾^{かざ}りて厨^{ちゆう}川^{せん}の柵^{さく}を焼^や亡^{むし}。又^{また}鎮^{ちん}守^{しゆ}府^ふの城^{じやう}を毀^く
 まつ。己^{おの}が隨^ま意^いせし物^{もの}とんとの伎^ぎ倆^{りやう}このうとて人^{ひと}はあつて街^{まち}衢^への風^{かぜ}声^{こゑ}

隠^{かく}れぬ。より某^{それが}密^{ひそ}錠^{じやう}を受^うけりこの処^{ところ}まで出^い逆^{さか}へくその長^{なが}櫃^びを穿^{せん}鑿^{さく}金を
 むが果^はして夥^{おほ}の贓^{ざん}物^{ぶつ}なり。汝^{なんぢ}これとて早^{はや}とてあつては。耦^{あひ}賊^{ぞく}なり。いふ
 四^よ箇^{かん}の長^{なが}櫃^びと披^ひんとつと死^しあを光^{あき}仲^{なかつ}の物^{もの}あり。夫^おの故^{ゆゑ}に箇^{かん}様^{よう}とよふ
 ろ。ありとあり貞^{まこと}よと欺^{かた}く罪^{つみ}軽^{かろ}く。大^{だい}膽^{たん}不^ふ敵^{てき}の奴^{やつ}原^{げん}をと声^{こゑ}あり絞^{しぼ}りて
 罵^{のの}れ。衆^{しゆう}皆^{みな}いの慌^{あわ}忙^{わう}と道^{みち}のぬるを泥^{どろ}よもつ。死^し皇^{かう}天^{てん}頂^{てい}を照^てら。多^{おほ}人^{ひと}は
 のを偽^{いつはり}の死^し既^{すで}にやとてこの長^{なが}櫃^びは多^{おほ}賀^が殿^の長^{なが}櫃^びあつて。驟^{しゆう}雨^うと避^よへて
 聊^{いささ}愆^{あや}をさす。櫃^びのぬるも腹^{はら}立ちとて。涼^{すず}は預^あると。以^もて捨^すて走り去^され。九^く常^{じやう}に
 めがが重^{おも}荷^なと早^{はや}く歩^あく。ねの上^{のうへ}の祈^{いのり}禱^{たう}の神^{かみ}符^ふ供^く物^{ぶつ}と。それを笑^{わら}ひて
 あつて早^{はや}起^おせ。今のうも多^{おほ}賀^が殿^のを。知^ちりぬ。人^{ひと}はあつて。物^{もの}を神^{かみ}符^ふ供^く物^{ぶつ}
 偽^{いつはり}の死^し捨^すて走り。つとて。そのあつて。あつて。重^{おも}く。この
 故^{ゆゑ}あり。と漸^{だん}くは悟^{さと}れども。何^{なに}等の故^{ゆゑ}と。由^{よし}なり。迷^ま惑^{わく}至^{いた}極^{ごく}つと。あつて。只^{ただ}穩^{えん}便^{べん}の

さん沙汰を願ねがひてをいへと辞ことひてく夜よを告つぐと重平ちゅうへいハさも果はを呵あと
 冷笑れいしょうひは水言みづごと巧たくをもしもその物ものと巧たくもは神符しんぷ獻備けんびの長櫃ながびをその
 僧坊そうぼうの寺号じごう山号さんごう昭あは書かつけく會符かいふと立たてもあらはなこれも彼かれも皆相みなあ似ひたり又
 何なにの院いんと僧坊そうぼうハ絶たく諸國しよこくハあるとねとう寺号じごうともさ定さむは敵てきは二人ふたりも
 留とどめを陳ちんせればと誰たれハ信しん人じん皆縛みなくわんを觀念くわんねんせも飽あぶも罵責まじく扇を扱
 さ招まけは稻毛いなぎが夥おほ兵へい奴隸ぬれいと彼かれ此こよりきりを聚あつまえしくをあらはな八十
 餘よの夫役ぶやくハ一人ひとりも漏もれぬ搦捕なつとらく珠教しゆきやう繫つかれぬを追立おたれば重平ちゅうへいハな奴隸
 小こは三十餘箇さんじゆいの長櫃ながびとこれも漏もれぬ早はやくは就中しゆちゆう彼四箇かと真先ま先ま推立おしくと
 勇ゆう一いつはは走去しゆきりたり光伸ひかりのぶハかともも知らしらぬ驟雨しゆううと乗のりぬるを馬うまの足撥あきをとあらはなす
 くとと十町じゆうちゆうあらりたり天あまハあく晴はれぬくは長唐櫃ながたうびと早はやくは歩卒しよそハお追おきぬるを
 下した後陣ごじんともああらひたり吉見殿きちみどのり共共とも鎌倉かまくらハいらぬと程程ほどは平坦へいたんハ駐るを馬うま

より下したりく床几とこざしと立たまり且かつく尻しりとかるを折おりく一個ひとつの夫役ぶやく泥どろを踢け立たく喘あきき走り
 ききの會釋かいしやくもはせぬ大将だいじやうのほろりを近ちかつたぬを左ひだり右みぎハ侍りたり武注ぶしゆ昌むね之のホは
 うち對たいひく遠とほくを額ぬかとつれぬ小入こいりハ長唐櫃ながたうびの肩代かたしろとせては夫役ぶやくハあらはなすふを嚮むかふを雨あめりく
 比速ひしやくゆく不慮ふりよのり起おりて走ありぬ夥おほ計けいの夫役ぶやくハ稻毛いなぎ太郎たうらう重平ちゅうへいハ矢度やどハ搦捕なつとら
 られりその故ゆゑハ箇様くわんさうと驟雨しゆううと避さげぬ騷さわだは謬まうくは彼外かの長櫃ながびと破やぶりたり初はつめ
 自他みたの長櫃ながびと送おくりぬく重平ちゅうへいハ打披うちひれぬそのを終はりぬとせては報はつたへぬ汗あせ汗あせ
 拭ぬぐは小入こいりハ折れぬ敗まるを草鞋くさじやと更かへぬ二町にちゆうあらり後れぬ傳つたへぬ傳つたへぬ
 脱だれりられば間道まんだうあり潜るを後のくを近ちかつたぬを一いつ度いちど高たかくは夏草なつぐさの繁さかみぬるを
 兼かみぬく稻毛いなぎ殿どのの情なさけハ証しやう固こを竊せう聞きつた件けんの程ほどハ彼此かより聚るを聚あつまえしぬ
 二ふたが長櫃ながびも彼長櫃か長櫃ながびも奪うばひぬるを存ぞん一いつ早はや起おきぬ生拘なまりたり軍役ぐんやく共ともを頻ありたり追おきぬ立たてぬ
 立たてぬ鎌倉かまくらのくをあらりたり道引みちびきちきぬを走去しゆきりぬらればあらりたり道みちを過あらはなす

いづはばいふぞ知召さるべし彼禍なりあはれ他の長櫃を昇起せし怨より起り
 一とまはるも面かた更あらず神符供物といわれ榎より金銀巻絹調度などの
 夥しあはれ始りしにこれの趣を報せんとあひて冬面をかぎり阿容こと
 おん迹と慕ひありしに。かゝり推系つるありぬと倅詳を告ぐあはれ武詮も昌之も是れ
 ころの辨りもたかくひとく驚嘆あらず光仲これぞうちあはれ愀然として眉を
 顰めわたりし。その光仲とて憎みありて陥んと伎倆しあらんや異変のす
 ありとも人々駭然騒ぐべし。好も反も光仲が身望りしをぞあはれん陸奥あわい
 日ハ三ヶ月の戦ひは士卒軍令をすく守りしに滲あつるものなりし功成りし師を
 欠し鎌倉へ入る途ゆく彼禍を醸せし歩卒が罪なり。只一日路の程かれば
 何のあはれと容易もあはれん。あはれんやあはれんや。あはれんやあはれんや。あはれんやあはれんや。
 油断しき用意をせぬ。腹驟雨は追れり馬を走りし。後方よりあはれんやあはれんや。

ともあはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。
 帰陣しと事の次第をまうし。解入太郎五の後陣は退りし件のすと吉見殿は竊か
 告あはれしね軍兵ハニゲニこの処は留置されば四郎の後陣をもち合しその二隊と
 抱く徐々も来よあはれぬ。耶と解諭武詮頭を傾けしつり。案の怪し死
 りのありとありの急ぎ。柳營はありぬ。吉山のまもあはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。
 騎は足らぬ。それをも過半送しぬ。非常のありのあはれんと死誰うとの仇と防は誰か
 おん身は代はれ死に策よハ也とも暴は病病幾とぬと披露し。且くこのはらう。あはれんや。あはれんや。
 ぬ。某使者とて執権の邸に赴はれ。竊は氣色を窺は便りをあはれんと。あはれんや。あはれんや。
 いづと其は光仲頭とて。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。
 罪をぬらん。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。
 とて。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。あはれんや。

鎌倉殿より雪とこれが寛仁は身を喪ふて且悪名を留めぬ識者の
為は笑まふ士卒と云ふも田舎の猜疑を避るるあり太郎五はとく校陣の
退りこれのゆゑ冠者は勝へよとて立れども昌之はあやふく
沈吟とてさしあつ某の初より大将の庇を立く君父の怨を復せしもの今
日の難義及びび誰か一步も退くべし且くあま坐を占めて吉見殿を遠く
追つたるべきなりと推辞は光仲はあつた汝達の信夫の奮臣冠者の譜第
わなはむも蓮姫のふとをさすあつたあつた間中守直下河邊高吉は
老黨と彼此へ遣はれはその代は霎時この隊は諫すの光仲は義を立はる要
かかすも意は任せぬと理り切く諭せども兩人はあつたけし宣言吉見殿の
古主の誓君はすあつた等閑はあつたあつたあつたあつたあつたあつた
せくれ彼君の年来の大望を果して死なれば是れおん身の安危の吉見殿の

浮沈は係りのつれづれにも忠と義の志はあつたあつたあつたあつたあつた
諫と光仲頻りに焦燥く无益の論議は時を移さば後悔時を噬むと
あん汝達の汝達の志をわへしこれの意は任せぬとてあつたあつたあつた
馬は閃りとうち乗りの鎌倉を投ぐ走らぬがこの時をばく諸軍共誰か
この処は送り留らんとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
まは禁めぬとてあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
真光は進み小袋坂まであつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
これに心の安うねと己とをわけて馬より降るこれに多賀藏人が降る
帰陣しと柳營へあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
守の雑兵は角門を半開け多賀殿はあつたあつたあつたあつたあつたあつた
いそがし光仲の後を後者とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

足さるる雑共九三百人。或は劍戟の鞘を外し或は弓杖突立。齊とてひそ
 當下割具足は臂燈脚甲をる。両個の武士進。光仲は對ひ多賀藏へけ
 あり。又おん疑のまらあは。その身を召進。先首將軍家の台命と稟。在柄
 平太胤長仁田四郎忠常小関と守。侯と久し。國法は腰刀とをさす。以て
 嚴命令と傳れ。雑共の囚轡とをほり。昇り。光仲は些も駭く
 氣色をく。身を取て。おん誓めを蒙。いふ。ひひ。台命。か。是非。及ぶ。律の
 計ひ。思と。ろ。び。れ。せ。ば。両刀と。と。轡。を。衆。移。浩。旭。武。詮。昌。之。士。卒。雜
 兵共。侶。直。走。り。ま。ち。の。武。詮。昌。之。先。進。之。戒。も。破。れ。も。ち。敵。に。これ。陸
 奥の軍役。後。ゆる。兵共。之。奮。勇。を。驍。勇。は。士卒。濁。雜。と。道。より。あり。く
 多賀藏。後。れ。り。あ。閑。多。と。呼。び。胤。長。裡。面。より。声。高。や。よ。ま。る。兵共。衆。れ
 多賀光仲。の。罪。あり。く。囚。徒。と。あり。る。ぞ。光。仲。か。の。と。く。を。れ。が。後。に。後。み。ゆ。り。め。く

賞罰ハ沙汰及ぶ。おの。故郷へ。お。え。か。の。仰。を。受。る。在。柄。平。太。胤。長
 仁田四郎忠常あり。あ。ろ。均。さ。散。動。た。く。嗟。嘆。の。声。を。合。り。る。中。に。武。詮。昌。之。を
 ろ。も。援。も。も。意。と。ま。る。り。散。動。た。く。嗟。嘆。の。声。を。合。り。る。中。に。武。詮。昌。之。を
 送。恨。は。堪。ば。声。を。り。立。光。仲。の。け。を。も。逆。賊。退。治。の。大。將。と。り。あ。り。わ。その。罪
 あ。れ。が。後。者。一。人。も。許。さ。れ。ぬ。の。と。朽。す。お。ん。の。故。洋。も。あ。り。と。再。び
 之。が。胤。長。が。胤。長。と。い。ふ。兵共。光。仲。の。任。重。く。も。囚。徒。と。あり。る。後。者。を。許
 して。俱。を。え。ん。や。これ。嚴。命。は。依。る。所。に。私。に。阻。む。は。わ。が。異。議。及。ぶ。在。柄。平。太。胤。長
 捕。ん。む。の。あ。り。只。穩。便。は。退。散。せ。其。身。の。為。の。後。日。の。沙。汰。は。宜。し。死
 主。の。為。も。と。あ。り。る。や。と。り。退。死。之。と。正。首。は。諭。し。る。後。の。音。も。武。詮。昌。之
 苗。と。切。く。心。を。り。の。早。れ。ど。も。許。さ。れ。ぬ。因。り。の。中。に。せ。ん。と。一。圓。を。と
 退。死。く。冠。者。は。更。の。趣。を。告。め。る。せ。く。と。り。な。る。を。吐。た。り。あ。り。彼

竊ひそりかちに相あひありし衆しゆ共に侶りよをひ引ひくはるは足あのあ運うびも弱より果てしつつといふは

 ありて吉よ見み冠かん者しや義ぎ邦ほうのの道みち中ちゆう後ご陣じんとと言いひしては忠ちゆう忠ちゆう

 蒙もう二に郎らうとと傳でんけく後ごにに立たちし士し卒そつ雜ざつ兵へい陸りく續じつとと進しん前ぜん面めんよりより来きまり武ぶ

 昌ちやう之しをを頻ひんりにに走そうりし近ちかつつとと義ぎ邦ほうありし怪あまりとと馬まをを駐ちゆうりし

 人ひともも走そうりし来きてて光くわう仲ちゆうのの人ひと送おちちりし彼か長ちやう櫃びののううええ云いふは義ぎ邦ほう

 つつとと地ちをを怨うむむくは馬まをを降かりし路ろ邊へんのの小せう草そうの上の上にに敷ふ皮ひ布ふししてて廣くわう光くわう

 招まきま集しゆめめ彼か凶きゆう變へんとと告こげげ程ほどはは関かんののままりり退たいれれままるる士し卒そつもも其その処ところにに聚くわい合ごうすす彼か

 告こげげはは報ほうれれがが後ご陣じんのの士し卒そつ地ちをを死し呆あれれとと駭おどどとと大おききにに義ぎ邦ほうのの忠ちゆう

 ありしのの乱らん雜ざつとと鎮ちんめめををせせとと藏ざう人にんとと極ごくめめ死し計けい策さくもも欲よく得とくとと議ぎすすはは廣くわう光くわう

 蒙もう二に郎らう等らうもも頻ひんりにに遠えん恨こんをを堪かんんぬぬ來き殘ざん區く々々のの夏げ果くわ沈しん義ぎ邦ほう

 沈しん吟いんとと異い義ぎははいいれれ萬まん死しとと怨うむむとと報ほうひひ恥ちをを雪ゆきめめ夫ふう婦ふう主しゆ枝し再さい合ごうのの素そ懐くわいとと

其所そのはは遂すいにに誰たれがが惠めぐむむやや只ただ朝あ夷いとと多た賀か氏しととこのこの兩りゆう雄ゆうのの資しををめめりり

 ありしふふ彼か人にん軍ぐん功こうありしののままりりのの賞しょうををひひとと諛ゆ者しやののままりり中ちゆうらられれてて不ふ測そくのの罪つととと

 ありしんん命めい運うんももあありり何なにのの了りょう簡かんもも及およぶぶ死し義ぎををせせんんとと男おとこ

 たりたり鶏けい鳴めいのの客かくありしとといいふふとと小せう袋たい坂ばんのの新しん関かん守しゆとと流りゅう計けいりりととちち越こてて安あん危きとと

 藏ざう人にんとと共にせせんん嚮きやうをを桎けい尾びをを過かりし折せききののふふけけののとと暑あつききはは薩さつ姫ぎのの長ちやう途とはは惱なうむむ

 心地こころ例れいををひひとと安あんええとと保ほ養やうのの為ため其その処ところはは懇こんひひととあありり時ときとと秘ひせせししてて藏ざう人にん

 ありし後ごれれとと悔くわいととあありり今いまもも亦また後ごあありり辭し去さるるとともも再さいひひ諛ゆ者しやをを誣しよはは罪つと

 ありし罪つとををひひととんん何なに國こくありし立た潜せんををききとと義ぎをを背そむけけとと父ふ祖そのの罪つと

 降かりりとと既すでにに決けつせせりり長ちやう食じき淺せんのの益えきあありりあありりつつとといいふふとといいふふ

 ありし涙なみだをを含くみみてて必かな死しとと究きゆうりり當たう坐ざのの決けつ断だん日にち来きやや立たたたりり氣け色しき雄ゆう々々あありり

 ありし廣くわう光くわう繼けい忠ちゆう武ぶ詮せん昌ちやう之し四し名めい齊せい一いつ感かん激げきととあありりとと心こころをを更さらにに又また

初の度は許されぬ軍兵も後陣を命て被新関をぬく邁はゆき度の方
 多し渠の故郷へえんとて老兵も招きよせつ云云と拘るは士卒の
 力と脱く嘆息の外走もあく是首も十人被首も五人うち相譚る多賀
 慈善と音とく傷と吸ひ糧と分ち士卒と憐れあやるとの恩義莫大なり
 吉見殿の源家の上臈温順の仁義ありければこの庇も立ても後憑しく
 多賀も多賀殿无実の罪は沈む吉見殿も安らぐ今この危窮の時臨
 ちかく捨く離散せぬ定は是あはれ不義もあはれ小袋坂は新関をさ
 此度の軍役より一もの皆追えんとをゆるすや許さぬ関ありとも大勢
 あらや合さばら破りての越す一はゆたの多賀殿の罪と増せのさか
 益ぬれとつぐせん夫石を犯し身とく入りは稍逆賊を滅しゆりの
 甲斐もあく只一掬の賞もあはれ追えんと腹平まは只是恨の限り

大功ありて越度多は大将を囚れぬは俺們が幸ぬはの談のさかんとあひ
 帝もあはれぬべかれは我意を立すの要なりとくあより退散せん誘吏を
 老兵も諭し巻と握り齒と切る者武者も己とゆむ義邦主後を
 告ぐあはれ涙と拭ひぬ食奮里へとあはれ栄枯得失有為轉變定む世の
 たを重ひはる戰場も功と争ひ勸賞の樂も中央に旅泊は呻
 吟あはれ苛政の苦も忽来る人あはれあはれ家路迥は異かれも憾
 おれ王鉞の道のぬるを右よ左と吸ひ被る声答る声も竟るあはれ
 菅姫は被凶変の越と使女あひより轎子の内は伏沈とて唇塞は苦も
 切父伊豫の判官平家追討の軍功ありあはれ後者あはれ誣れは鎌倉へ
 情あはれ腰越より追えられぬけん過事あはれあはれあはれあはれ
 からく義邦夫婦主後今も只七人はあはれあはれあはれあはれあはれ

月見五編卷二

ひとく立ちあがり。今い夫役もなかりぬ。篋姫の轎子の継忠と蒙二郎が辛くく
握起し武詮昌之相助く。早は後には續たり。程は義邦の兵隊もあまされぬ。
廣光の先を進む。城戸を敲く。声高き。云と名告は。関の雜兵もあて
吉見殿が。下知あり。軍兵とも。おろす。彼も。人数の。多く。ど。問。れて。廣光
は。命の。趣。を。傳。へ。之。の。軍。兵。中。の。身。の。暇。を。取。り。今。一。騎。も。い。な。す。主。後。様。
七人の。中。の。女。僕。一。人。あり。即。冠。者。の。内。室。あり。あれ。ら。の。や。と。あ。う。と。言。語
あ。の。呼。門。へ。雜。兵。の。心。と。答。て。あ。か。且。く。の。城。戸。を。開。く。と。死。黄。昏。あり
これ。が。在。柄。平。太。胤。長。の。雜。兵。は。兩。三。束。の。焦。火。と。照。さ。し。角。門。より。進。む。吉。見
主。後。と。と。ん。か。つ。ま。ほ。り。近。く。立。對。ひ。吉。見。冠。者。の。和。殿。あり。耶。多。賀。光。仲。罪
あ。あ。り。既。に。禁。獄。せ。れ。う。り。と。の。軍。兵。と。逐。退。せ。め。ん。は。其。小。け
あり。と。の。新。関。と。守。と。り。彼。義。邦。入。り。あ。る。主。後。と。の。苗。指。記。速。は。せ。え

あ。げ。く。な。月。お。下。知。と。俵。へ。と。豫。り。沙。汰。せ。る。あ。る。不。冠。者。の。軍。兵。と
離。散。せ。め。く。夫。婦。主。後。様。は。七。人。の。弓。箭。と。合。ひ。後。者。の。鋒。長。刀。と。携。さ
せ。ば。か。の。と。く。め。く。あ。れ。の。兒。首。も。稱。え。死。の。進。止。神。妙。あり。其。是。和。田
左。衛。門。尉。義。盛。が。族。子。の。和。田。の。在。柄。平。太。胤。長。と。が。俵。あ。か。入。り。と。り。と
誘。引。あ。ら。と。あ。る。義。邦。主。後。の。事。も。ひ。や。り。易。り。死。を。僅。く。お。ら。ぬ。禮。正。と
問。ふ。隨。は。姓。名。と。告。り。或。は。本。貫。来。由。を。報。り。れ。て。裡。面。入。り。わ。り。か。く。平。太
胤。長。の。義。邦。夫。婦。主。後。と。関。の。守。屋。は。苗。指。記。の。兵。よ。の。一。室。と。守。り。の。あ。ら
と。の。俵。の。趣。と。執。権。評。定。衆。は。報。い。一。通。の。星。書。を。の。こ。と。家。謀。と。と
遣。は。ら。と。と。の。胤。長。の。情。の。侍。を。義。邦。夫。婦。後。者。も。と。勸。め。と。た。ら。と
の。割。菴。と。ま。の。膳。と。薦。め。く。長。途。の。疲。勞。を。慰。ふ。江。三。二。廣。光。
蒲。殿。は。仕。り。返。は。面。と。識。れ。が。これ。彼。空。谷。足。音。の。多。あり。これ。な。り。胤。長。



月夜五篇之二



月夜五篇之二
問註所へ赴く

月夜五篇之二

義邦の素生を疑ひて範頼の二子白鳩丸ありし上風の嵐雨空の
光仲の素生を疑ひて範頼の二子白鳩丸ありし上風の嵐雨空の
光仲の素生を疑ひて範頼の二子白鳩丸ありし上風の嵐雨空の
光仲の素生を疑ひて範頼の二子白鳩丸ありし上風の嵐雨空の

後輯第四十四

尼御殿の流言
衆議廳の讞獄

是より先仁田四郎忠常ハ君命已上を以て囚籠せしむる光仲と早出
さく程は平太ふされ雜兵先と追士卒と左右後方より立て同注所
赴く程は大約その道より良賤道俗これとなく意無慙や光仲ハ奥六郡
猛威と振ひ一梟賊経任を討滅せよその恩賞ハ初れ囚徒とありしを
何れぞ嘻痛ありくといぬぬのあつり多され罪人光仲を忠常がねて来つ
り同注所へ坐する當廳の別當三善入道善信評定衆大江廣元共侶ハ

着坐し市の別當稍毛太郎ハ夥兵光仲を受取し忠常を還しり
この日既暮れて是く夥の燈燭ハさながら白昼異なり光仲ハ廣元
善信ハ同注所の簀子の屋より光仲を召のけ即仰せ傳へて云多賀藏人
光仲兇賊征伐の功を以て賞罰と恣よせのめり賊の財宝と盗ん
為す或ハ厨川の柵を燔け或ハ鎮守府の城を毀ち土民の口を塞るる賊の兵
糧と散し私恩を被け刺副將廣綱ハ鎮守府より逐電し公命と茂如
せり或ハ獨光仲恩賞を貪んて相資く大功ある朝夷三郎義秀と追
退け鎌倉へ俱し事ハ男廣綱と残害し七竊ハ骸を埋りてこれら
り実知ハその罪既五逆は下れりかたもまうしとくす有や問れ光仲
頭と擡某不肖の元龍の悔と云い任重く功高され人の諛許ある
あん賊の兵糧と餓る民と賑せし暴と去く仁は帰くその義と賞

せんがのりく上の恩澤を施し、乃のいりてう私恩を被ん又厨川の柵を燦に
 鎮守府の敗城を毀し、土地廣く民離散、軍兵少く守るは定むべし。
 捨措ハ賊の残黨再び憑らん、あまの公の抱か、有れども要なく無れば患ひ形し。
 よりてあつ計ひり又賊の財宝の某あつてこれを討て、莊官は預けぬ、彼地は
 せん使を遣はれ、目録と引合し、更に分れあさうもいづと又朝夷三郎義秀の軍
 功第一あり、ハ曩ハ詳は注進の状に載り、相伴んと勧やうとも義秀ハ礼を
 阿三丸と喚れる、和田義盛の三男、幼稚より時故あり、父義盛ハ愛と失ひ
 安房國之成長より親の勸當免され、鎌倉ハ赴死くと推辞一切從は
 且その側室友鶴とのつもの、越中國若神の豪民、稻向判五、女兒ハ産後の位ハ
 肥起、ど風の便りふせ、一ハ彼亦と訊慰んとて、遂ハ越路ハ赴死、又凱陣の比
 ちりやく廣綱道世あつて、一ハ驚死憂く隈もあつて、任方と索ひ、一ハ今ハ

便りをゆつと、その道世の為、我ははれども素より、勢利の巻、とて
 爵祿と辞し、富貴と捨て、太田の郷に隠れ、るも台命脱、路をれば戰場ハ
 赴ち、功成り、身退た、い、廻その願ひかん、免許を稟、ゆるく、隱道の
 咎ありといせ、此度の軍功と名さ、償は不足、死、秋光仲が賞、換て、ま
 宥めんと豫て、い、ひ、た、か、ま、あ、う、し、誦、を、も、か、ん、疑、ハ、解、を、あ、わ、く、ハ
 命運の縮、所、是非、及、び、曲、々、よ、い、ひ、つ、げ、廣、元、を、ひ、く、あ、れ、れ、ど、御、邊、の
 長櫃、三十餘箇、あ、つ、中、ハ、四、箇、ハ、全、く、贓、物、之、燈、扱、既、ハ、明、白、な、れ、ば、中、と、も、立
 ぐ、と、い、れ、れ、光、仲、些、も、礎、殘、せ、ば、その、の、其、中、ハ、告、る、もの、あり、と、粗、を、ま、り、を、ハ
 夫、役、ホ、が、浅、く、何、人、あ、つ、計、れ、て、外、の、長、櫃、を、早、め、と、起、し、く、その、奸、計、を、察、し、
 彼、の、もの、を、問、せ、め、來、歴、分、明、な、し、と、又、ハ、善、信、頭、と、ち、掉、り、を、ハ、空、に、く
 胡、論、の、殘、り、也、四、箇、の、長、櫃、ハ、他人、の、物、あり、とも、その、由、を、定、り、よ、あ、つ、何、と

上ゆんといひ果て立んとしつとを義時急推禁め光仲私怨ありといふも其の
 一箇の人物ありちんて他の功を媚と猶且その旨を駁河前司と害をた願ふ
 其腹黒た下司の悪言あるは致愚意をてきまらぬを且くあぬぢちて光仲が
 帰陣の後その進止を心と附か言の虚実もその中みればといふあやうは
 といをいあへは時政の白やうの頭をさうあ押と慈悲佛眼も人よまへて叛逆の
 報知といふも光仲果と怒れ耽りく友と追ひ男と殺さる君は忠ありもの
 かんや渠の元来木曾の残黨樋口が子といふ今凱陣の折より旗を鎌倉へ
 揚ぐは死致れ亦あへて所詮小袋坂のほりうを関をさそくその軍兵を
 一騎うとも鎌倉へ入るとを許さ光仲と説計を搦捕とを捷路かゝるを
 鼓く敦固に義時頻り嗟嘆しつたもまよ疑ひあを推さ禁めあひあひ
 あれはもの虚実定ちぬ早ましく光仲と搦捕とを罪かゝる鹿忽あへ

あつその長權を穿鑿とて後小云と計ひ多つらと思惟ふ言見冠者
 後陣の軍兵と抱く光仲共侶鎌倉へ入ると致豫さうその報り徳久ゆめ
 義邦その性柔弱れば光仲が搦捕をせ怒る来し関を攻め鎌倉へ入ると
 是くびりも東のこの地はあふ光仲と死れは彼人これ蒲原の独見
 のく乳名白鳩丸あり世の風聞は紛れあ且その舊臣江廣光も今あや在れば疑ふ
 べくはあは賢慮あまのいふを時政眼と時り吉見冠者蒲原の子と
 ひさの日蔭の花之親の罪あり死と賜り手は七命し属籍を積その屬あり
 信夫莊司と兵は死に阿容と賊は生拘られ久く柵を繫れり時夏と
 討つといふその功も賞はる足らぬいふも軍兵あり共追えん
 勿論あんと辞せしと答ふと足御臺うあうあうの白鳩丸のうも
 古幕下の頼朝も打めをあう思吾ん云を宣ひい言の葉の耳は遠れり

蒲殿の罪定むるを早く失ひてはかたがた今亦情を義邦と追
 退けり古幕府の御ありては侍も亦情を義邦と追
 けれども景盛の故ありて將軍家の勅當せられたるも
 りて東様とも同く定めぬと他はありては理りも時政も又拒
 められぬ先仲の罪ありては忍ぶるもあらず誰と接されば義時
 再び小藤を進めて原の一後ハ稻毛四郎がやめげり
 貝市の別當より重平より光仲が長櫃と穿鑿せしむる
 中來素樸の城戸を修理して事熟る武士兩入三百の兵と諫守り
 ぬ失ありと大の機將軍家はゆえあけぬ音は任し
 備難ありと時政笑片向く寔は然りありと応く共侶退り
 然る夏の趣を頼家卿よりゆえあけぬ稻毛太郎重平は光仲が長唐櫃と

悉穿鑿せよと凱陣の途より猛小袋坂は関と在柄平太と仁田
 四郎は夥の士卒と諫守り光仲も捕捕る義邦も捕捕る
 軍兵は追ふ追ふと捉るかくる日の下晡は稻毛太郎重平は光仲の
 長櫃を送る豪奪め夥の軍役を捕捕るのそりなり云云と報
 時政は光仲が賊罪證既明白なれぬ身も捕捕る
 小袋坂の胤長忠常は最命と傳へるあは及ぶなり軍監佐味
 内高利も光仲が邪を推應する罪を輕くはせり外國十室
 被けり閉籠り絶えぬ人の許し光仲が使者下河邊小三郎
 飾りもその罪高利も等しと亦佐味も捕捕る番を
 下河邊高吉は廣綱の道世といひ光仲の禁獄といひ彼と云ふ

歎死ハ浅ク憂苦勝ト断ルモ身ハ囚レ心ハ死ク籠鳥徒ヨ遠山ヲ瞻
 望ク暮雲の往方ヲ懐カ如ク器魚大洋の波ト慕ク愁ヲ具瀬ハ訥ヨ由
 死ハ似テ強楚亡ビ韓彭惨ラ重耳還リ介推焚ク唐山人の悼ム
 榮枯寵辱定め死人の人又ヨシク哀レカク又その次の日ヨ
 稻毛太郎重平ハ先仲ガ長唐櫃ト昇リ一駁の夫役ト皆獄舎ヲ牽出
 臧物の来歴ト速ニ首伏セテ杖ト揚ク撲トれども夫役ホウ以
 所初のどクカレバ重平大ク焦燥ク或ハその背ト割り或ハ口ヨ水ト飲レ
 さカセテ夫役ホハ苛責ヨ堪バ且ク苦痛ト脱スんぬ彼四箇の長櫃
 カハ経任ガ財宝カレシメの来歴ト定メテ神符供物の長櫃カ先仲の
 物カビトヤセハ偽リカレト二人カカレテ因テ重平ハ且ク昆苛責ト
 止メ即件の趣ト時政廣元善信ホ報カレ時政稱テ歎ビクさバ亦

光仲トイフ責バハワヤク臧物のカカレテ廣綱の存亡虚実義秀ガカレテ
 明々地ニ首伏ス死シテ責ヨ火カレ水カレカレの隨ヨセカク憚ク氣色カレク
 指揮カレハ入道善信眉ヲ擧ゲテ否カレテ後ハカレテ死光仲カ罪アリトイフカ
 冠階六位ハ升レテ逆賊征伐の大將カレ今カレテ身ト匹夫ト等シク鞭懲カレ
 律カ違ヘ但幾遍カ向往所ヘ召サレ向カレ禁メテ傷ト見カレ廣元頻リカ
 點頭カ入道の意見寔カ是リカレテカレテ六國の刑法正シテ又君カ威徳カ
 損カレテカレテ人再ビ賢慮カ旋リカレ共伴カ煉カレ時政ハ黙然トシカ
 又カレテ眠カレ如ク且テ眼ト睜開カレテ愚意カ及ビカレテ將軍家ハカレカ
 どもカレテ音カ依カレ太郎ハ且退カレテ下知カレテ俟カレテカレテ
 扇杖カ突立テ夫カレテカレテカレテカレテカレテカレテカレテカレテカレテ
 多クカレテ件の夏カレテ頼家卿カカレテカレテカレテカレテカレテカレテカレテカレテ

あり疑ひぬるの三つあるといふや賊の糧を散りて餓る民と賑し賊柵と
 燔け敗城を毀しん君のむねを等閑かぬこれの器量の捷し町賞を
 べく罰さすべ被漢土の経籍を罪の疑ひぬこれと免し功の疑ひぬを
 賞はしつるや光仲の罪の趣疑ひぬかたのむねをわづらひ恨みあるは竊に陷
 るんて夫役ホを欺りて長櫃四箇を増加えし欺苛責の苦しぬありて
 証言は伏せり下郎の俗情沙汰は及ぶこれ彼もく光仲が薄命嘆さる
 あまりあり速寛枉を釋し恩賞を仍れぬ彼奸人の鬼胎を抱き誣者ハ
 舌を痛むし愚按の趣かくの如しと言爽は議さるん義盛能負然びて
 莊司微妙くいれり某ホもさるるのむねをわづらひぬるも證據明白ある
 あり當坐は度言さるるがかりハ是才の短たぬ多かり寔は宏論感佩せりと
 西人齊一稱を時政らちんて冷笑ひ平に證據と外みく罪なりといひ依估

ありて其具負の沙汰よと詰む重忠此も撓る悪と善と邪と
 正と其の辨理義あり依估と依估といひ具負ととり某ハ只理を推て義と
 取の外論淺しや光仲果しく罪ありて初渠を汲引せし貴翁の孫泰時
 ぬとどがれの地は措んとあるや泰時ぬ弱冠されども理義よさうしく
 恥をたれり彼少年ハ三月の比克使とて京都に赴け六波羅の館に留りてかへり
 ぬのびをよめりこのむね席より列らぬ恥てみづる罪をたんり連坐れ科
 ありて其を依估され具負あり誹謗の承直され國は曲まる民や
 とを殘し勝て殺と去るん竟舜の與る所暴を懲ふて刑は淫るハ策討つ
 七る所和漢の先蹤み相同ト理義ありて證據ありてわづらひぬる外に
 求むべきといふも時政怒りは堪へ推向る膝もてとひけて拒む事
 程は義時ハ通とせ親と隔て重忠よち對ひ流石ハ識者

世に許されし。貴所の辨論今中下り。殆視聽を驚せり。多し。も。こ。つ。ふ
 い。つ。つ。ハ。亦。一。徹。の。論。を。の。つ。つ。と。わ。れ。ば。光。仲。の。罪。疑。し。く。も。證。据。も。亦。又。古。よ
 あ。く。し。か。れ。ば。その。死。罪。と。宥。り。く。然。る。武。士。は。領。け。る。を。求。む。し。其。の。虚。実。も
 定。ふ。あ。る。や。阿。ん。彼。蘇。味。道。が。摸。稜。の。後。和。熙。は。對。し。て。説。く。も。わ。れ。罪。を
 一。時。は。決。り。た。その。情。竟。は。頭。も。ん。愚。意。も。亦。摸。稜。は。庶。幾。し。こ。の。父。の。性。急。あ。る。も
 老。の。癖。ゆ。ぞ。わ。ん。ど。ん。こ。ろ。あ。か。け。ひ。そ。と。木。中。も。就。じ。草。の。り。つ。た。大。人。と。す。小
 和。解。れ。が。廣。元。善。信。感。服。し。て。相。州。の。意。見。ハ。穩。便。ゆ。く。寔。中。と。訊。つ。の。後。之
 且。光。仲。と。獄。舎。あり。ひ。こ。し。て。誰。も。も。あ。と。その。身。を。管。り。捕。籠。く。措。か。つ。が。わ。れ。禁
 獄。は。あ。せ。と。わ。ん。某。亦。も。豫。あり。か。つ。を。あ。ひ。ひ。か。れ。と。の。義。盛。能。買。ひ。已。上。と。と
 せ。う。多。死。の。あ。り。と。し。て。義。時。の。意。見。予。が。意。を。辨。へ。り。あ。く。光。仲。ハ
 せ。と。点。頭。し。て。頼。家。遣。は。す。あ。ひ。ひ。く。義。時。の。意。見。予。が。意。を。辨。へ。り。あ。く。光。仲。ハ
 嚴。料。の。保。殘。と。解。放。く。左。衛。門。尉。義。盛。は。領。く。へ。寛。屈。の。證。立。ん。日。を。あ。ひ。ひ。

その身と召籠く親族妻子の音耗を許しをかれが又依味竺内高利ハ嚴重の
 咎れを故べく光仲のみの果人日あせその出仕を禁むべし又彼吉見冠者義邦ハ同
 宗の親とあり久ら民間は零落しと百折千磨の艱苦を歴しその薄命憐
 愍し。あれども渠ハ光仲と莫逆の交ありとぞいふその忠奸を詳せば聊軍功
 ありとせよも輕き賞か。一昨夕あり荏柄平太は留めしと小笠原
 在りと致す付ハ迺胤長は領指人これ亦宿所召籠く怠慢の失ありとかりし
 これ又抑り義邦と極罪と經任を撃捕且單身の厨川三百賊を屠り
 朝夷三郎義秀ハ益世の勇士なり渠ハ義盛の蔭子かこれ當家増第の
 のありのそその大功を賞せむ死し。その人となりて人を笑く甚湯に
 近習は。如そく召使人とせり。何ホの故う。親義盛も。言ハ
 背。連。ま。の。勘。當。と。宥。免。く。を。あ。く。の。身。を。あ。ひ。ひ。と。の。他。瑣。細。の。ゆ。づ。り。

執権元老相譚ゆゑ宜く相計ひ少く。叔和と田左衛門の彼義秀をけつるを。
 二公子ことあるより。次主の為親の爲は悪むべし。あるは。年未だ
 離る故こそわづらひ。つゝあつと問せぬ。義盛へ唯と忘る小勝を進め。河城は
 黙止がごとし。某壯年あり。比彼巴は産する。阿三丸といふ男見あり。質弱多病
 あり。これ法師よせんといひ。つゝ巴の朽とく。あひん。忽地よ世と遊む。此の
 折乳母某とつひ。阿三丸と抱た。逐電して。往方ある。巴は送金に
 あり。後よ。安房国朝夷郡の百姓豊六といふ。の某も良人あり。
 夫婦あり。合つ。阿三丸とあつ。隠して。字育して。や。如此。人。ゆ。ゆ。
 復さる。不慈。似く。也。も。某。ころ。は。羞。す。あり。や。て。黙。止。ぬ。後。又。反。り。
 父也。彼豊六が子阿三郎と。少年親の讐と報ん。為。眼代。龍堀。園内。の。其。徒。
 五人。と。廻。中。と。走。り。て。往。方。と。あ。つ。た。や。阿三郎。阿三丸。と。介。後。何。処。は。立。階。は。ん。

風の使りも。ゆ。ゆ。の。心。は。わ。ら。ぬ。あ。つ。ね。あ。つ。の。と。せ。ん。と。あ。つ。の。義。は。
 就き。そ。の。大。々。か。ぬ。情。由。ゆ。ゆ。な。ね。も。明。々。地。あ。つ。わ。け。さ。り。あ。つ。今。御。座。な。り。
 彼義秀と。子。わ。ん。と。あ。つ。の。渠。朝。夷。と。号。す。の。安。房。の。郡。の。名。と。取。れ。り。又。義。秀。と。
 名。告。る。の。親。の。名。の。二。字。と。取。り。次。且。古。幕。下。の。恩。賜。の。名。刀。俱。利。迦。羅。の。一。口。と。
 阿三丸。取。り。て。義。秀。の。彼。宝。刀。と。今。も。身。に。帯。き。て。平。丸。燈。籠。の。
 ち。か。く。の。親。の。心。を。追。失。ひ。ぬ。あ。つ。の。乳。母。が。奪。め。て。走。り。て。義。秀。平。丸。と。
 子。の。鎌。倉。へ。と。事。の。某。對。面。せ。ぬ。あ。つ。今。恩。命。の。辱。れ。親。子。の。ま。い。の。
 上。か。つ。使。と。遺。され。ぬ。渠。も。亦。歡。び。て。速。に。ま。あ。ん。次。又。心。り。あ。つ。の。近。居。世。の。風。
 聞。は。義。秀。の。義。と。守。り。て。甚。は。武。骨。の。社。使。あり。と。や。光。仲。既。に。功。あり。て。一。介。の。
 賞。と。な。れ。ば。罪。蒙。り。ぬ。と。傳。へ。び。渠。の。徹。心。を。と。義。を。成。し。て。辞。し。
 あり。ん。次。親。も。も。と。恥。し。た。渠。が。あ。つ。の。側。に。一。光。仲。の。名。を。吉。見。冠。者。と。

重忠
時政の
奸人
衆

奸賊々々
悪ヤ

北條時政

和田一盛

杖父、重忠

北條時

比企下貞



功ありての勸賞は預て囚徒は異なりとて... 彼地へ遣へし... 常盛をともある人柄... 倉義秀と親しめし... 主の書翰と齋し...

涙とも君と父との使者と問へばその身の... よくあつて脱路の剛情我慢の愚俗あり... 声洩れ義時の計議と感徳の... 時政は對ひて更に復議... 領事佐味三内ホガ献り... わが心を梟首せられぬ賞罰... 莊司の意見寔は所以あり... 爛れく觸躩とあつて...

せりかたに現るるのりかんとて時政をくさるべしとて伊持の邊り島に
 せられんや勿論に但時夏が首の梟とてその故の梟の初任誅伐の副將
 たるもの戦ひ利ありて賊降すものかんとて今任任はとひとくこれを
 梟のれをこれ君の恥辱とせよ披路するは似うこの残の要ありかんと
 拒むる重忠推返して君子の過は日月の蝕の如し人皆これとんを更れ人皆これを
 仰ぐ時夏が叛逆の任仕中も倍せとあり何とこれが渠へ君恩を仇めし賊を責け
 御方と賣く脱れう原御家臣とありこれと梟首せどとのかとを君の
 むん恨と飾ふはく公の亦只君の人のをかた執推もこれの残をいつか
 しく脱れぬん再三評議と擬しとて辞と竭と討論はる忠勇推し怕
 しく碌の為とと鉗まれば世は有るは直言かれども時政のめく後とて言果
 べくもあざれば廣元善信これと和解てこの残も亦決しとて一憲断すともめ

とて兩人軀てこの趣をむとてくばえわげに頼家卿もとてく時政を思ふは有た
 ぐとて案に煩ひぬひて且して宜かろうなるの評議はるのりかたは只仲ふく人の
 かんが逆賊とて梟首のりかたの例と勘て後日はあうりつる又義邦主役と
 領くべに在柄平太胤長越中へ遣して義秀を徴しに兒和田新左衛門常盛
 中へ今日御教書を賜らん廣元善信奉りて形のとくはあて光仲もあて
 義盛は仰るが今さう違背せむもあざればの餘漏らるるあての相言
 集會はこれとてあんばとてあての暇とあての近習の翠簾とあての
 後堂へ入りぬの時政は面を起してひり竊に笑しけりははははとてあての
 起して大教の袖引繕ひ悠とてく先立は廣元善信義盛能負重忠も
 義時も送る辞讓の威儀正しくあての立退出なる

